

追悼

## 至誠の師・永安幸正先生

古川 範和

——木を見る時は、まず根つこと幹を見て、その後に枝葉を見るんだよ——

「皆さん、こんにちは。私は永安幸正と申します。」二〇〇三年春。私は麗澤大学国際経済学部に入學し、「経済原論」という必修の講義を受講した。

この人、普通ではない——これが第一印象であった。それまでの十八年間の人生において、出会った瞬間にあれ程圧倒されたのは初めての経験であった。

「皆さん、正義とは、そして愛とは何だろうか。私はこう考えます。……いや、これは宿題にしましょう。ねえ皆さん、来週までに、愛とは、正義とは何か、書いて来て下さい。」

どうやら教室を間違えたらしい、そう思った。「自分が受けるのは『経済原論』であって『哲学』ではない」などと思ったからである。しかし、教室はそこに間違いなかった。

これが私の、先生との出会いである。

先生のゼミへの参加が始まったのは、それから二年後のこと。平成一七年度第一回目のクラスで、先生のお言葉によって心を震わされた記憶は、今でも鮮やかに甦る。

「皆さん、外国へ行かれた経験はありますか。国際便に乗るとね、成層圏を飛ぶんですよ。雲の上。だからいつも晴れてますよ。たとえ雲の下が、地上がどんな嵐の時でも、雲の上の成層圏はいつも晴れてる。だから皆さん、努力して成層圏へ行くんですよ。そうすれば、何か社会で問題があっても、それに捕われることはない。いつも自由でいられます。楽しいですよ、人生が。自由な人生はね。皆さん、一緒に成層圏へ行きましょう。」

数週間後。

「誰か僕の助手やらない。今やってくれてるのが、今度インドに留学しちゃうから、一人要るんだよ。資料探したり、私の原稿を校正したり。誰かやらない。」

クラスの度に先生の勧誘があったが、希望者が現れないので、先生の誘い方が変わった。

「君、どうだ。……そうか、やってくれるか。じゃあ君、どこに住んでるの。連絡先は。研究室の場所わかるか。漢字読めるか。英語は——まあ、英語はいいか。あ、ちょっと黒板に名前書いてみて……。」

研究センターにおける先生は、全くの別人であった。厳しい。周囲への、特に助手である私への要求は厳しかった——しかし、ご自分に対する厳しさには底知れぬものがあった。

私が助手になった頃、先生は、千葉大学名誉教授・多田顕先生による江戸時代の兵学者・山鹿素行の研究

を『武士道の倫理』という書物に纏める、というお仕事をなさっていた。またその他にも『総合人間学モラロジー概論』の編集作業や、ご自身の論文である『歴史論ノート』の執筆、『倫理道德の白書V01・1』の校正、栗原英二先生の『経路・続』の編集、その他を、同時に行っておられた。先生は視力が著しく衰え、既に体調が宜しくなかったのであるから、驚嘆する他ない。

その頃、特に時間を費やしておられたのが、『武士道の倫理』である。「原典に忠実に」というスタンスの多田先生の原稿は、山鹿素行全集からの引用を多分に含んでいた。山鹿素行は江戸時代初期の人物であるし、全集も戦前に作成されたものである。当然、今では使われない言葉、漢字が多く用いられている。

「おい、音読してくれ。音声化されたものを聴くと、文章がおかしくないかどうか、良くわかるんだ。」

言葉のリズムというものは大事で、それによって文章の善し悪しがわかるといふのは事実であろう。しかし、私には、私の日本語教育のために「読み合わせ」が行われたのだと思えて仕方がない。だが、私はこの「読み合わせ」が怖くて仕方がなかった。私が読み間違えた時の先生のお怒り様といったら、それはもう凄まじかったからである。

「貴様、こんなものも読めんのか!」「なあ、おい、お前いつも何考えて飯食ってるんだ!」「ああ、情けない!」「ふざけるな!」「どうしてそんな読み方になるんだ!」「どうしようもないな、お前は!」「いい加減にしろ!」「その字はさつきも出てきただろう!」「一回で覚えろ!」「親が泣くぞ!」

先生の叱責は学園を出ても止むことはなかった。先生がお元気なうちは、毎日、先生のお宅まで共に歩いて帰らせて頂いていたが、その中で、よく問答が行われた。

「道とはなんだ、古川君。」

「道は……」

「とは、と言え！ 道は、なんて幼稚な言い方をするな！ 道とは、だろう！」

「済みません。道とは……」

「そう！」

「道とは、人が通……」

「違う！ 道を通るのは人だけか！ もっと一般的に、最小限言わなければならない事だけで良いんだよ！ 他のことは、言うなら後だ。いいか、物事の定義というのは……」

激しく怒鳴りつけられることが度々あったが、正直、一度たりとも恨んだことはない。この事は自分自身でも不思議に思っている。「偉大な感化力」とでも呼ぶべき何か絶対的なものを感じていたのは確かである。その「偉大な感化力」の存在は、消極的な側面にのみ表れたのではない。お体の自由でない先生の支えとなるような事があれば、何でもして差し上げたいと思われた。そして、何故か、そのような時は必ずしも「先生の御為」という心持ではなく、「自分の為」という心境であった。

怒られてばかりという訳でもなく、たまには褒めて下さることもあった。館と鞭という言葉があるが、私の直感によれば、先生のお言葉は政策的に吐かれたものではなかった。

「君と話すのはとても楽しいよ。」「君みたいなのは初めてだ。」「そう、その理解で良い。」「ハッハッハ、そうだね、その通りだと思うよ。」「身体には気をつけろよ。心配なんだ、君は俺の息子だから……。」

先生の寛大さを知るきっかけとして、世間の人々と道德の關係に対する考え方が挙げられると思う。

「世間の人々が道德というものを顧みないのは、そういう人々じゃなくて、道德の方がいけないからよ。」

道徳に欠陥があるんだ。」

先生の御宅の夕食に、幾度となく招いて頂いた。先生のご家族のお作りになるお料理は本当に美味しいのだが、もう一つの楽しみが、ご家庭における先生のお姿を見ることである。先生には、今では三歳を過ぎているお孫さんがおり、その元氣なお孫さんのお相手をされるお姿は微笑ましかった。お仕事で、神経が張り詰め、全意識を書物や原稿に集中されて微動だになさらない先生にはどこか非人間的な雰囲気があったが、ご家庭で「お前は俺の宝だ」と笑いながらお孫さんを抱き上げる先生は、人間・永安幸正であった。

二〇〇七年を迎えられた先生。やはり体調は宜しくない。その前年からそうであったのだが、先生はもう、入院し続けなくてはならないお体であったようである。退院されると、すぐに具合が悪くなってしまふのだ。それでも、先生はお帰りになる。体力の衰弱が著しくなって、最早ご講義をされるなどということは、普通に考えれば「不可能」であった。だが、先生に「ご無理をなさらないように」と言ってもほとんど意味をなさなかった。

「教室でなら死んでも宜しい——休講するよりは。」

私が入院中の先生のお見舞いに伺った時、先生は私の今後の話しかされなかった。私がお孫さんの最近の様子について伺おうとしても、そのような隙など微塵も無く、まるで研究室にいらした時のような面持ちでいらっしやった。

「人間には、そう、どんな人物にも、命を懸けて取り組むべき仕事というのが、人生に少なくとも一度や

二度、ある。人生において大事なものは、それだ。他はいつでも宜しい。」

遺言にあたるようなことを、二〇〇七年三月二十五日即ち私が助手を退任した日、お車の到着を待って研究センター入り口前のベンチに腰掛けていた時、おっしゃっていた。そのお言葉は先生の人格を、最も端的に表している。まるで先生の定義——先生の人となりを説明するために「最小限言わなければならない事」であるかの如くに感じられる。

「古川君。

人間というのは、何のために生きるのか。

それは、社会に貢献するためだよ。

それが人間に与えられた全てだ。

——他に生甲斐なんて、無い。」